

# 小学校における伝統的な言語文化の指導のあり方 —古典への興味関心を高めて、言語文化のよさを 感じ取る授業を目指して—

赤木 雅宣<sup>※</sup>

The Way of Teaching Traditional Language Culture in Elementary School :  
Aiming at a Lesson That Enhances Interest in Classics and Senses the  
Goodness of Language Culture

Masanobu AKAGI

In this paper, interest in children's classics is enhanced by incorporating activities that translate classics into contemporary languages and compare the views and feelings of their own with those of older people. Translation of classics to modern language that is considered difficult for elementary school students is possible by showing the meaning of words difficult for children to understand. By doing so, children can enjoy classics in modern languages by referring to the meaning of words. Activities to compare the views and feelings of old people and their own are mainly focused on finding connections between their own ideas and those of old people. Children's interest in classics has increased by finding similarities of thoughts and ways of living with people in the classical world where lifestyles were completely different. Although the classics class of elementary school focuses on reading aloud, it turned out that classics class centered on activities which compare classics with modern languages and compare viewpoints and feelings of their own with those of former people, are satisfying. From these activities, children will increase their interest in classics. If we can make children love classics, it will lead to noticing the goodness of classical language culture.

Keywords : Interest in classics, Translation of classics to modern language, compare the views and feelings of their own with those of older people

## 1 はじめに

小学校学習指導要領に伝統的な言語文化の指導についてきちんとした形で記された

のは、平成 20 年告示のものからである。その指導要領解説では、伝統的な言語文化を小学校から取り上げることについて<sup>1)</sup>「伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返す」とある。

キーワード：古典への興味関心、現代語訳、昔の人と自分のものの見方や感じ方を比べる

※ 本学人間生活学部児童学科

返しながら形成されてきた。それらを小学校から取り上げて親しむようにし、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるよう内容を構成している」としている。このことは、指導内容の構成が変わった平成29年告示の新学習指導要領においても引き継がれている。

では、どのように指導すれば、古典に親しみ、言語文化のよさを感じ取らせることができるのだろうか。本研究では、音読重視の殻を破って「昔の人のものの見方・考え方」に焦点をあてた授業づくりはできないものかと考え、計画、実践したものである。授業実践に合わせて、児童の意識についても調査を行い、子どもが古典に親しむとはどういうことかについて考察した。

## 2 研究の内容

### 2-1 研究の背景

2) 文化審議会答申「これからの時代求められる国語力について」(2004)には、「音読や暗唱を重視して、それにふさわしい文章を小学校段階から積極的に入れていく」べきであり、「古典については、日本語の美しい表現やリズムを身に付ける上でも音読や暗唱にふさわしいもの」とであると述べられている。また、中央教育審議会答申には、<sup>3)</sup>「言語文化としての古典に親む態度を育成する指導については、易しい古文や漢詩・漢文について音読や暗唱を重視する」(2008)と記載されている。これらを踏まえて、新指導要領でも<sup>4)</sup>「音読するなどして言葉の響きやリズムに親しむこと」を系統的に示しており、古典を学習する時に音読活動を重視することが当然のこととなっている。

そのことを否定するつもりはない。子どもにとって取り組みやすい音読という言語活動を重視して繰り返して声を出して読む活動を仕組み、必要に応じて暗唱等してい

く中で、言葉の響きやリズムに親しむことができる。そのことが「古典に親しむ」ことに繋がることは間違いないだろう。

問題にしたいのは、音読、暗唱それだけでいいのかということである。大学で教職課程を履修して小学校教師を目指している学生に小学生の時の古典の学習について尋ねると、「音読、暗唱して終わった」「(古典の授業=音読、暗唱中心であることが)いやではなかったけれど、おもしろくもなかった」…という感想が圧倒的に多い。これでは、古典に親しんでいるとはいえず、言語文化のよさを感じさせていないのではないだろうか。

### 2-2 研究の仮説

以上に述べてきた研究の背景を踏まえて、本研究では、小学生が伝統的な言語文化の授業で古典に親しみ、言語文化のよさを感じ取るための仮説を次のように設定した。

現代語訳をしたり昔の人と自分のものの見方や感じ方を比べたりする活動を取り入れることで、子どもの古典への興味関心が高まり、古典に親しんで言語文化のよさを感じ取ることができるであろう。

### 2-3 研究の構想

#### (1) 構想の概要

- ①事前アンケートを実施する(授業実践第1時の中で実施)。
- ②単元「古典の世界」(光村図書5年)の授業実践をする(第2時が検証授業)。

#### [単元の概略]

- 第1時 古典に出会い、学習を概観する。
- 第2時 「徒然草」を現代語訳して、作者と自分のものの見方や感じ方を比べる。

- 第3時 「竹取物語」「平家物語」「奥の細道」の現代語訳を確かめ、自分のものの見方や感じ方と比べる。
- 第4時 古典の学習をまとめる。

- ③事後アンケートを実施する（授業実践第4時の中で実施）。
- ④アンケート結果や授業中の子どもの様子等をもとに考察する。

## （2）事前・事後アンケートの内容

事前アンケートと事後アンケートでは、原則同じ質問をした。子どもの意識を知ると共に、授業での学習体験がどのように影響しているかを確かめるためである。

### 〔質問の概略〕

- 1 これから古典（昔の書物で多くの人に読まれてきたもの）の学習が始まります。どのように感じていますか？ その理由も教えてください。
- 2 古典の学習でやってみたいことには○印を、やりたくないことには△印を書いてください。
- 3 国語の授業全体を見たとき、古典の学習は好きな方ですか？ 嫌いな方ですか？ その理由も教えてください。
- 4 今回学ぶ（学んだ）「竹取物語」「徒然草」「平家物語」「奥の細道」4つの古典で一番おもしろそうなのは（おもしろかったのは）どれですか？ 理由も教えてください。

## （3）授業の構想

学習材は光村図書版5年の教科書に掲載されている<sup>5)</sup>「古典の世界（1）」である。見開き2ページに「竹取物語」「徒然草」「平家物語」「奥の細道」の4作品の冒頭や有名な部分を取り上げ、その現代語訳とその古典が書かれた（読まれた）時代のことや作者のこと、多くの人に読まれた理由など

の情報がコラムのような形式で掲載されている。

その学習材を下記のような構想で授業化することにした。尚、この授業を構想するに当たっては、本学附属小学校5年生担任東山貴子教諭の全面的な協力をいただいた。第2時（「徒然草」の現代語訳をして、ものの見方、感じ方を比べる授業）は、赤木が授業を担当し、それ以外の3時間は参与観察の形式を取らせていただいたものである。

### 〔目標〕

- ◎ 昔の人のものの見方や感じ方を今の自分たちのそれ（物の見方や感じ方）と比べることで、古（いにしえ）の人と自分たちとのつながりを感じることができる。
- 古典の文章を繰り返し音読することで、言葉の響きやリズムを味わうことができる。
- 現代語訳を作ったり読んだりすることで、文章の概略のつかみ方を知り、昔の人のものの見方や感じ方について考えることができる。

### 〔指導計画（全4時間扱い）〕

- 第1時《古典に出会い、学習を概観する。》
- ①古典（「竹取物語」「徒然草」「平家物語」「奥の細道」）に出会う。
- ②めあてをもつ。  
→「お気に入りの古典を見つけよう」
- ③自分の考えをもつ。  
→それぞれの古典について気付いたことを話し合う。
- ④それぞれの情報を知る。  
→教科書掲載の情報をカードにしたものを作品と対応させてワークシートに貼る。
- ⑤まとめる。  
→自分が気に入った古典を決めて、その

理由をワークシートに書く。

⑥事前アンケートに記入する。

●第2時《「徒然草」を現代語訳して、作者と自分の見方・考え方を比べる。》

①「徒然草」を学習することを知らせ、複数回音読する。

②めあてをもつ。

→「兼好法師の伝えたいことを読み取ろう。」

③伝えたいことを考えるために、現代語訳する。

→意味が分からない言葉は、訳語を示す。

→グループ毎に訳語をつないで、現代語訳を作っていく。

④「することがなくて暇なのはいいことではないか？」を問いかけて、兼好法師のものの見方、感じ方について話し合う。

→「作者・兼好法師の気持ちが理解できるか」を話題にして、今の自分のものの見方、感じ方と比べていく。

⑤「徒然草」が今も多くの人に親しまれている理由を考える。

⑥まとめる。

→「昔の人（兼好法師）と今の自分たちを比べてみると～

●第3時《「竹取物語」「徒然草」「平家物語」の現代語訳を知り、今の自分たちのものの見方、感じ方と比べる。》

①「竹取物語」「平家物語」「奥の細道」の現代語訳を受け取り、原文と対応して読む。

②めあてをもつ。

→「昔の人と今の私たちの考えや感じ方の似ているところ（つながっているところ）を見つけよう。」

③自分の考えをもつ。

④もった考えを発表する。

→3つの話それぞれの今と似ているところ、つながりがありそうなところを出し合って整理する。

⑤話題を焦点化して話し合う。

→「人が生きていく中で、今も昔も変わらないこととして、どんなことが見つかったか？」を話題にする。

⑥まとめる。

→「時代が変わっても、人の考え方や感じ方はつながっていきそうだ。それは、～」

●第4時《古典の学習をまとめる。》

①4つの古典「竹取物語」「徒然草」「平家物語」「奥の細道」を音読する。

②めあてをもつ。

→「今、お気に入りになった古典を紹介し合おう。」

③自分の考えをもつ。

→気に入った古典を決めて、その理由を記す。

④もった考えをグループの友達と紹介し合う。

⑤第1時に自分が書いた「お気に入りとその理由」と比べる。

→変わったところ、変わらなかったところ

⑥まとめる。

「古典を学習して分かったこと、気付いたことは～」

⑦事後アンケートに記入する。

### 3 検証授業

前述のように「古典の世界（1）」は、4時間扱いにすることにしたが、検証授業は赤木自身が実施した2時目とする。それは、子どもが自分たちで現代語訳をすることを通して、作者と自分の見方・考え方を比べることを主とするからである。

## (1) 子どもの実態

1時で4つの古典に出会った子どもに実施したアンケートの集計である。

### 1 これから始まる古典の学習について

- ・とても楽しみ 25人
- ・少し楽しみ 7人
- ・少しいやだ 1人
- ・とてもいやだ 1人

### 2 古典の学習でやってみたいこと

- ・音読をする ○26人 △8人
- ・古典の情報を聞く○28人 △6人
- ・現代語訳をする ○29人 △5人
- ・昔の言葉の意味や使い方を考える  
○30人 △4人
- ・昔の人の考えや暮らしなどを知る  
○31人 △3人
- ・今と昔を比べる ○26人 △8人

### 3 古典の学習は好きだと思うか

- ・とても好きだと思う 16人
- ・少し好きだと思う 14人
- ・少し嫌いだと思う 3人
- ・とても嫌いだと思う 1人

### 4 4つの古典で一番気に入った古典は どれか

- ・「竹取物語」 8人
- ・「平家物語」 17人
- ・「徒然草」 4人
- ・「奥の細道」 4人

古典の学習を楽しみにしている子どもが多い。どの学習活動も楽しみにしているが、これまであまり経験がないと思われる「昔の人の考えや暮らしなどを知る」「昔の言葉の意味や使い方を考える」「現代語訳をする」「古典の情報を聞く」などの学習活動に期待感をもっている。国語科のほかの

学習活動と比べて好きだ（おもしろそう）と思っている子どもが多く、4つの作品の中では「平家物語」を気に入ったと感じている子どもが多いことが分かった。

## (2) 授業の流れ

### ①「徒然草」を学習することを知らせ、複数回音読する。

範読の後、音読に取り組む。短いこともあり、複数回の音読もすぐに終わる。しっかりと声は出せているが、言葉の意味が掴み切れていないため、文字面を追っている部分は否めない状態である。

### ②めあてをもつ。

「兼好法師の伝えたいことを読み取ろう。」のめあてを伝えて、ワークシートに記入させる。分からない言葉を明らかにして、現代語訳をしないと、伝えたいことが読み取れないということに気付いてきた。

### ③伝えたいことを考えるために、現代語訳する。

意味が分からないという言葉は、訳語を示していく。訳語をつないでいけば、それなりの現代語訳になっていく状態である。グループ毎に現代語訳を作っていく。言葉上の訳を作るだけでなく、「どういうことなんだろう」と意味理解をしようとするグループがほとんどである。

「あやしう（しゅう）こそものぐるほ（お）しけれ」の「あやしゅうこそ」の意味を探ろうとする声が多くなってきた。

### ④話題を焦点化して、兼好法師のものの見方、感じ方について話し合う。

「することがなくて暇なのはいいことではないか？」を問かけると、賛否両方の考えが出てくる。「忙しすぎると困るけれど、暇すぎるのも困ると思う」のような考

えが出てきたところで、「作者・兼好法師の気持ちが理解できるか」を話題にする。何もすることがないならば、あまりいろいろ考えないでポーンとしておけばいいのに、心が乱れて気持ちが高ぶってしまうというのは、こんなことをしていいのかと焦っているのではないか。そういう兼好法師の気持ちは分かる。ずっと暇ですることがないとなると、自分もそういう気持ちになるような気がするという考えが大半となっていった。

⑤「徒然草」が今も多くの人に親しまれている理由を考える。

このように作者・兼好法師が、心に浮かんだことを書き綴っていったのが「徒然草」であることを知らせた後、800年近く昔に書かれた作品が今も読まれている理由について話し合った。人々の暮らしは全く違うだろうけれど、考えていることは似ていて、「今もあるなあ」「自分もそんなこと思った」と感じるから読み続けてきたのだと思うという考えが出てきた。

⑥まとめる。

「昔の人（兼好法師）と今の自分たちを比べてみると～」に続けて考えや感じたことを記していった。

[子どものまとめの例]

- ・昔の人も自分たちと同じように迷ったり悩んだりしていることが分かった。
- ・昔の人たちと自分たちがあまり違うことが分かっておもしろかった。
- ・忙しくても困るし、暇でも困る。では、どうすればいいのかと聞きたくなるけれど、それは今も同じことだと思った。
- ・こんなふうに昔の人の考えと今の自分の考えを比べられるとは思わなかった。

[授業で利用したワークシート]

The worksheet contains two pages of the text '徒然草' (Tsurezuregusa) with handwritten annotations and a student's response. The student's response is written in a box on the right side of each page.

4 検証授業の結果と考察

検証授業中の子どもの様子や使用したワークシート、アンケート等を基に、検証授業の結果を考察する。

単元終了時（第4時の終わり）に実施した事後アンケートの集計である。

1 古典の学習を終えての印象

- ・とてもおもしろかった 28人
- ・少しおもしろかった 5人
- ・少しいやだった 0人
- ・とてもいやだった 0人

2 古典の学習でまたやりたいこと

- ・音読をする ○28人 △5人
- ・古典の情報を聞く ○29人 △4人
- ・現代語訳をする ○29人 △4人
- ・昔の言葉の意味や使い方を考える ○26人 △7人
- ・昔の人の考えや暮らしなどを知る ○29人 △4人
- ・今と昔を比べる ○25人 △8人

### 3 古典の学習は好きだと思うか

- ・とても好きだと思う 20人
- ・少し好きだと思う 11人
- ・少し嫌いだと思う 2人
- ・とても嫌いだと思う 0人

### 4 4つの古典で一番気に入った古典はどれか

- ・「竹取物語」 9人
- ・「平家物語」 17人
- ・「徒然草」 4人
- ・「奥の細道」 3人

## (1) 子どもが現代語訳という活動に取り組むことについて

教科書通りに扱えば、現代語訳は載っていて、子どもはそのまま目にするようになる。意味が分からないという言葉は訳語を示していくので、訳語をつないでいけば、それなりの現代語訳になっていく状態を作った活動である。グループ毎に現代語訳を作っていくと、言葉上の訳を作るだけでなく、「どういうことなんだろう」と意味理解をしようとし始める。このことに意義があるのではないだろうか。

「あやしゅうこそものぐるおしけれ」の「あやしゅうこそ」の意味を探ろうとする話し合いが、多くのグループで展開された。教師が問いかけて話し合いを起こすことは可能だが、自分たちで問いを生み出すことができたのは大変意味のあることだと考える。

## (2) 昔の人（作者・兼好法師）と自分たちのものの見方、感じ方を比べるという活動に取り組むことについて

出家して「何もすることがない」という状況を望み通り作り出したにもかかわらず、「心乱れて気持ちちがたかぶってしまう」と迷い、嘆いている作者・兼好法師の考えを読み取った子どもに、自分の今を重ね合わせて考えるように声をかける。この授業

の山場となるところである。

書かれていることを理解するだけでは、「そんなことがあったのか」で終わってしまう。理解できたところで、「今の自分だったらどう感じるだろうか？」を投げかけて、グループ毎に話し合う活動をもった。授業者としての印象で言えば、子どもは考えること、友達と話し合うことを十分に楽しんでいた。多くのグループの考えの変遷は概ねこのようであった。

○「何もすることがない、暇だ」というのは、いいことだ。しかも、自分で望んでそうしたのに、心が乱れるのはおかしいのではないか。

○「何もすることがない」ということが時々あるのはいいことだけれど、ずっと続くとしたら、結構しんどいかもしれないと思う。

○「何もすることがない」という日が毎日続いていたら、きっと「これでいいのかな」と思い始めると思う。それが「心が乱れる」ということ。自分がそうなるも、暇すぎたら「ウーッ」「何とかしてえ」となってしまう。

疑問から始まった話し合いは、状況をきちんと捉え、自分の今と比べていく中で、作者・兼好法師への共感へとなっていった。今回はグループでの話し合いという活動にしたが、古の人がどんな暮らし方をしていたのかと思いを馳せ、自分の今の暮らしと似ている、違うと比べてみるからこそ、古典を読むときの楽しさではないだろうか。

## (3) この本（話）が今も多くの人に親しまれている理由を考えることについて

800年近く昔に書かれた作品が今も読まれている理由について考え、話し合った。一つ手前で、昔の人（兼好法師）と自分たちのものの見方、感じ方を比べるという活動をしているからこそこの活動である。昔の

人々の暮らしは全く違うだろうけれど、考えていることは似ていて、「それ今もあるな、自分もそんなこと思ったなどを感じるから読み続けてきたのだろう」という考えに落ち着いていった。ここまで考えさせることが必要かどうか、押し付けにならないかは迷ったところであるが、徒然草という古典の魅力として捉えさせたかったのである。子どもの発言から見ても、期待していたような考えをもたせることはできていたと考えられる。

## 5 事前・事後のアンケートの比較と考察

第1時で4つの古典に出会った子どもに実施したアンケート結果と、単元終了時(第4時の終わり)に実施した事後アンケートの集計を比べてみる。

### 1 これから始まる古典の学習についての期待と古典の学習を終えての印象の比較

・とても楽しみ	25人 → 28人
	とてもおもしろかった
・少し楽しみ	7人 → 5人
	少しおもしろかった
・少しいやだ	1人 → 0人
	少しいやだった
・とてもいやだ	1人 → 0人
	とてもいやだった

事前アンケートで「とても(少し)楽しみ」と応える子どもが多いことに驚いた。理由の記述を見ると、「今まであまり読んだことがないから」「どんな学習になるか楽しみ」という期待感を記したものが多かった。新しいことを学ぶ時は少なからず期待を抱くのだろう。それを萎ませることなく維持することが求められているのである。「とても(少し)いやだ」と応えた子どもの理由は、「難しそうだ」「古くさい感じがする」だった。

事後アンケートでは、全員が「とても」(少し) おもしろかった」と応えた。事前時に「とても(少し)いやだ」と応えた2人は、「とてもおもしろかった」に変わっていた。

楽しみにしている子どもが多い新しい学習として取り組み、きちんと手順を通して考えさせていくことで、「古典の学習はおもしろい」と思わせ続けることができるのではないだろうか。

### 2 古典の学習でやってみたいこととまたやりたいことの比較

・音読をする	○26人 △8人 → ○28人 △5人
・古典の情報を聞く	○28人 △6人 → ○29人 △4人
・現代語訳をする	○29人 △5人 → ○29人 △4人
・昔の言葉の意味や使い方を考える	○30人 △4人 → ○26人 △7人
・昔の人の考えや暮らしなどを知る	○31人 △3人 → ○29人 △4人
・今と昔を比べる	○26人 △8人 → ○25人 △8人

どの学習活動でも、事前と事後で大差はない。

音読については、指導書等に示された通例の授業展開と比べると、読む回数が少ないと思われる。「したくない」と応える子どもが8人から5人へと減っている。読む機会の少なさや暗唱を求めなかったことが関係しているのだろうか。

古典の情報を聞く、現代語訳をするなどの子どもにとって新しい学習活動は、それほど難しいと感じなかったのか、「△やりたくない」が増えていない。

昔の言葉の意味や使い方など、言葉そのもののことを考えることは、「△やりたく

ない」が4人から7人に増えている。手順を踏んで気をつけて展開したつもりだが、難しい学習をしているという印象を払拭し切ることは困難なのだろうか。

昔の考えや暮らしを知る、今と昔を比べるという活動については、今回の取組で一番大切にしてきたところである。アンケートの結果から見ると、学習の前後で大きな変化はなかった。大筋で、今回のような学習活動が受け入れられていることが分かる。一方で、「またやってみたい」という子どもが増えることはなく、昔の考えや暮らしを知るでは、1名ではあるが「やりたくない」の方が増えている。子どもにとっては、ほかの学び方も体験してそのうえで比べてみたわけではないので、「めあてをもってそれについての考えをつくり、考えを交流し合って深めていく」という学習の展開の仕方の方で判断したのかもしれない。人数的には少ないが、こういった学習に興味をもちにくい子どもへの対応、活動の工夫等については今後の課題としたい。

### 3 古典の学習は好きか (好きになりそうか、好きになったか) についての比較

・とても好きだ	16人	→	20人
・少し好きだ	14人	→	11人
・少し嫌いだ	3人	→	2人
・とても嫌いだ	1人	→	0人

事前と事後で大きな差は出ていない。その中では、「とても(または)少し好きだ」と応えていた子どもが88%から94%に伸びている。また、「とても嫌い」がいなくなり、「(少し)嫌い」と応えた子どもが、12%から6%に減っていることは評価したい。やる前に食べず嫌い状態だった子どもに「やればできる(できそう)」「嫌ではなかった」と感じさせることができたのであ

れば、このような取組は子どもにとってプラスだったと言うことができるのではないだろうか。

### 4 4つの古典で一番気に入った古典(気になる、おもしろかった)の比較

・「竹取物語」	8人	→	9人
・「平家物語」	17人	→	17人
・「徒然草」	4人	→	4人
・「奥の細道」	4人	→	3人

この項目では、驚くほど変化がなかった。最初に「おもしろそう、気に入った」と感じたら、簡単には変わらないということのようだ。理由の記述を見ると、その古典の情報を知って現代語訳をしたり今の自分たちの暮らしと比べてみたりすることで、「よりよく分かった」「より好きになった」と応える子どもが多かった。気になった古典のことをより詳しく知り、描かれている人(人々)の暮らしに思いを巡らせ、自分たちと比べてみることで、元々気になっていたのが好きになってきたということのようだ。

古典の学びとして大切なステップを通ることができていて、好きな理由をもつことができているという状態になっているのではないだろうか。

## 6 研究のまとめ

### (1) 研究の成果

本研究を通して、現代語訳をしたり昔の人と自分のものの見方や感じ方を比べたりする活動を取り入れることで、子どもの古典への興味関心が高まることが確認できた。一般的には、小学生には難しいのではないかと考えられがちな現代語訳も、子どもにとって理解しにくいと思われる言葉の意味を示していけば、それを参考にして現

代語に直していくことができた。その取り組み方は興味をもって積極的なものだった。結果として現代語訳ができるかどうかよりも、こうした過程を通して考えていくことがおもしろいのではないだろうか。現代語訳をしていく中で、考えるべき問題が生まれてくる（「あやしゅうこそ」の意味を探ればよいという問題意識がつくられた）こともあり、有効な学習活動だと考えられる。

昔の人と自分のものの見方や感じ方を比べたりする活動は、昔の人と自分たちの考えのつながりを見つけていくことが中心となる。生活の様式が全く違うであろう古典の世界の人と現在を生きる自分たちの考えや考え方の似たところを見つけていくことで、古典と子どもの距離をぐんと近づけることになる。ただ、「比べよう」と伝えたらすぐに比べられるものではない。何と何を、どう比べていくのかという絞り込みを教師がしておく必要があることはもちろんのことだ。実際の授業で言うと、比べられるようにする問いかけが中心発問（「することがなくて暇なのはいいことではないか？」）であり、それに沿って考えを出し合い深めていく時を授業の山場とすることができることが分かった。

音読という学習活動を中心にした単元、授業づくりが一般的な中、今回のように現代語訳をしたり昔の人と自分のものの見方や感じ方を比べたりする活動を中心とする授業が成立することが分かった。これらの活動は、子どもが「古典の学習＝音読⇒暗唱」と思い込みがちなところに学習活動の幅をもたらすことができるものと考えられる。子どもが古典の学習にやりがいをもって取り組み、古典に親しみ、古典を好きになる可能性があることを示すことができたのは何よりの成果である。

## （２）今後の課題

現代語訳をしたり昔の人と自分のものの見方や感じ方を比べたりする活動が、即古典に親しんで言語文化のよさを感じ取ることにつながっているかという点、今回の実践だけでははっきりとしない部分が残る。古典を身近なものにして、親しむ態度を育てることに貢献したことは確かだが、言語文化のよさを感じ取らせることができているかは不明である。それぞれの話が何百年も経った今でも読み継がれている理由を尋ねることで、言語文化としての古典を意識させようと試みたが、やや強引で、子どもが言語文化のよさとして感じ取ったとはいえないからである。

今後、音読という学習活動を中心にした単元、授業の成果と、今回のような現代語訳をしたり昔の人と自分のものの見方や感じ方を比べたりする活動を中心とする授業の成果を比較したいと考えている。そのため、同じ学校、学年の別のクラスでそれぞれの単元、授業を実践していけば、それぞれの学習活動のよさや不十分さ、難易度等を検証できるのではないだろうか。古典を言語文化のよさとしてとらえさせていくには、どういった活動を組み合わせていくのが効果的なのかについて更に考えていきたい。

## 7 おわりに

本研究では、学習指導要領が求めている「古典への興味関心を高めて古典に親しみ、言語文化のよさを感じ取る子どもの育成」について、一定の成果を挙げることができた。限りある授業時数の中で「興味関心を高めて古典に親しむ」授業を行うには、子ども自身が現代語訳をしたり、昔の人と自分のものの見方や感じ方を比べたりする活動を取り入れることが有効であることも確認できた。少なくとも、繰り返し音読をさ

せて、きちんとした目的意識のないままに暗唱させていくだけの授業からの脱却に向けて、一つの方策を示すことはできた。昔の人と自分の考えや考え方を比べるという学習活動に磨きがかかるように、様々な方策を想定して研究を深めていきたい。

本単元、授業の計画・実践に際し、終始協力をいただいた本学附属小学校5年生担任の東山貴子教諭と、事前事後のアンケートに快く協力してくれた5年B組の子どもたちに深甚なる謝意を表したい。

## 8 文献

### 《引用文献》

- 1) 文部科学省 2008 「小学校指導要領解説国語編」東洋館出版 p.7
- 2) 文化審議会 2004 「これからの時代に求められる国語力について（答申）」
- 3) 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学

校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）

- 4) 文部科学省 2018 「小学校指導要領解説国語編」東洋館出版 p.25
- 5) 甲斐陸朗ほか 『国語五銀河』 光村図書出版 pp.56～62 2014年検定済教科書

### 《参考文献・研究報告》

- 1) 大熊徹、藤田慶三編 2009 『「伝統的な言語文化」の授業ガイド』 東洋館出版
- 2) 市毛勝雄編 2009 『伝統的な言語文化を教える1—伝承文化・やまとことば文化—』 明治図書
- 3) 永野真 2010 『小学校における「古典に親しむ」授業づくり』 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告 8;pp.1～6